

沖

10
2022

令和4年「沖」俳句コンクール発表

俳句雑誌(10月号)



山車の修羅

能村 研三

大龍寺の子規の墓

お盆の供養で菩提寺の谷中の延壽寺に詣でた帰り、田端の大龍寺にある正岡子規の墓を訪ねた。9月に松山の子規記念館で行われる講演を前に子規の遺徳を偲びたいと思っただからである。谷中から田端は電車に乗ると3駅あるが、車で行くとわずか3キロ位の位置にある。父登四郎も若い頃おそらくは田端の家から谷中の菩提寺までは歩くこともあったのだろう。旧道らしき道を走ったが、谷中銀座の裏手にあたるところなのか個人商店が並ぶ下町情緒溢れる道であった。田端の大龍寺には10年前位に吟行会で訪ねたことがあったが、近年になって二階建ての本堂が建つて以前の面影とは違っていた。

路地になほ路地ありて行く甚平翁

終曲の打楽器乱打夏行かす

ゆるく寄せゆるく巖打つ盆の波

書き出しの糸口探す夜の秋

立秋の一机一脚テレワイーク

散る前の萩の湿りを知りてをり

橋詰めには括れる道や曼殊沙華

定家蔓咲き余りたる境垣

本堂わきの墓地には、子規の墓をはじめ、宮廷音楽家のE・H・ハウス、陶芸家の板谷波山、柔道の横山作次郎などの著名人の墓もあった。

子規は根岸で亡くなっているのですが、本当なら谷中の寺に墓を設けるところであったが、「静かな寺に葬って欲しい」

「酔った花見客にステッキの先で墓石をつつかれるのは嫌だ」と生前佐藤紅緑にいい、死期が近くなつて弟子たちが田端の大龍寺を探し伊藤左千夫らが下見したと言われている。

墓は本堂の奥手の竹が茂っているあたりであり、正面が子規の墓で、右には母親の八重、左には正岡氏累世(代々)の墓がある。

墓は大きくはないが、その隣には墓碑が建っていて碑文には松山藩士の子であることや、陸掲南の新聞「日本」から貰っていた月給が30円であったことまで書かれている。竹ノ里人の号に因んで植えたのか、墓の後ろには竹が茂っている。

墓石の「子規居士之墓」の字は、陸掲南(子規が新聞記者として働いていた新聞「日本」の社主)の筆跡だそうだ。

子規の墓の墓参の後、根岸の子規庵を訪ねたが、閉館時間を過ぎていて入れなかったが、鶯谷の羽二重団子の本店に立ち寄った。

芋坂も団子も月のゆかりかな 子規

祝祭の日か船虫の賑々し
逆光の貌持ち帰る夏の果
信玄の甲冑にある秋の声
棚経に疲れの見ゆる僧の袈裟
刀豆や根性論の廃れをり
下り築付録のやうに雑魚かかる
錆鮎の骨抜き兄を悼みけり

今年の稲刈りも終わった。半月前なら豊穰な稲穂の波が大地をうねっていたのであるが、今の大地は肩の荷を下ろしたように静かである。登四郎先生にへさがぐる稲架に幾つの祝言葉の御句があるように、本来なら今頃の田んぼには稲架の列があつて、人々が米の出来高を話し合うなど賑やかなものであつた。しかし、今は専業農家の減少や後継者不足という問題もあり、田んぼで見かける人も少ない。それに伴う機械化を便利と言ふべきか、稲刈りは家族総出というよりも稲刈り機と軽トラがあれば夫婦二人でも出来るのである。そして刈り取った稲穂も軽トラで運び乾燥機に掛けられて出てくる。俳句作家にとって稲架の景色を詠むには、山峡の段々畑などへ出なければならぬまい。稲架のある日本の農村の豊かな秋の景も、天日干しの美味しいお米も懐かしい

蒼茫集

西日より

甲州千草

*西日より引き抜いて買ふ竹箒
夕焼ごと熟睡子渡さるる腕
会場の無音に畳む白日傘
筆立ての筆記具斜め酷暑なり
意に添はぬ片方の眉朝ぐもり
二百十日の隅に転がす鉄亜鈴

等身大

峰崎成規

五欲抜け今空蟬に朝日透く
のうぜん花垣に夕映え絡め燃ゆ
瑠璃蜥蜴ジュラ紀のままの身の湿り
端居して心に浮力湧くを待つ
ひとすぢの刹那の茶毘か星流る
*新涼や等身大は生きやすし

よくのびる

町山公孝

*鎌倉が五日で滅ぶ夏季講座
水彩の色よくのびる今朝の秋
秋立つや姿を見せぬバンクシー
箒目の渦のまん中秋立てり
盆東風や帰郷列車は窓開けて
新涼や朝を始むる烏どち

軽すぎて

栗原公子

*向日葵や言葉にすれば軽すぎて
滴りや聴きたき一語ききのがし
待つといふ昂りのあり花火の夜
きはやかに潮目帯なす晩夏光
月涼し高階の灯をつみかさね
遠き日に戻れる魔法ソーダ水

画布

辻美奈子

一枚の空を画布とし山滴る
山じまひするてふ枇杷を賜りぬ
口紅なほすカサブランカに隠れ
*透き通る寸前優曇華のみどり
みどりごとに旋毛のふたつ天の川
落し文拾へと言はんばかりかな

その向うに

千田百里

ライバルでベターハーフで冷奴
高上る噴水主張くり返す
*単線の終点その向うに秋
新涼の野に在りて野を忘れをり
八月や裸婦像の掌に永遠の鳩
月在れば月夜に逝きし母を詠む

潮鳴集

永久に 宮坂秋湖

あどけなき児の祭文唱ふ施餓鬼棚
迎へ火や寄り添ふ児らよ吾が宝
魂棚の遠い遠いと先祖の名
* 敗戦忌永久に敗戦忌の日本
吾亦紅くりくり風を泳がせて

夜の樹間 兵藤 恵

雲を置く夏野に遠心力生まれ
かなぶんを踊り場に掃き寄せてある
* 峰雲のつひに漢でなくなりぬ
本閉ぢて落日にをり夏の果
漠漠と台風の来る夜の樹間

日本の形 大橋松枝

捨つる水に陽の匂ひたつ大西日
朝さやか三度確かめ生地を裁つ
* 唐辛子の真つ赤日本の形して
通さるる雨月の宿に香を聞く
流燈のちらちら遠へ川の闇

映画化 河寄祐二

* 西日中けふ一日を映画化する
梅雨明けや空一隅の長唸り
いつまでも気にかかる本半夏雨
一瞬に一過の紫紺野朝顔
夏の街半分敷くか雨柱

水平思考 平松うさぎ

* 身の内の水平思考藤寝椅子
炎天を来てレントゲン黒と白
石庭に輪廻の波や蟬しぐれ
秋はじめ鉢に沈めるシーグラス
身の底にひぐらしの声溜まりをり

近江上布 栗坪和子

袖とほす近江上布に水匂ふ
旅人としてうぶすなの祭笛
* でで虫や急ぐ勿れと楸郵忌
どこ迄も青田どこ迄も海上郡
理科室に大きな海図夏休

草野球 広海めぐり

ひぐらしの水にひびける奥花背
* 雲の峰少女の混じる草野球
天も地も円く閉ぢ込む露一穎
カーラジオ不意のノイズの敗戦日
真つ新な鶴の羽箒朝の茶事

がうがうと 富川明子

一徹の鱧の骨切る紺襷
月渉る古地図に有りや盆の道
生身魂聞き上手てふ生き上手
八月の測れぬ祈りの深さかな
* がうがうと炎帝在はす登窯

てつぺんの水 七田文字

糸杉の振れ立ちたる真炎天
* 噴水のでつぺんの水上機嫌
水泳の敗者を支ふロープかな
四万六千日一回で針穴に
花一匁と寄する白波夏岬

黙 禱 菅原健一

黙禱の声に止みたり蟬時雨
みみずといふ字のごと蚯蚓這ひ出せり
隠しごと下手な男のサングラス
* 寝転べば蒼に溺るる夏野かな
青林檎自分を「ぼく」と言ふ少女

飛鷹選評



能村 研三

万緑を吐き出してゐる阿形像

坂井 博

寺の山門の左右に金剛力士像が立っている。一般には仁王像の名で親しまれているが、金剛力士は仏教の守護神である天部の一つである。阿形像は怒りの表情を顕わにし、吽形像は怒りを内に秘めた表情を表わしている。掲句、大きな寺院の後ろには緑豊かな山を据えており、阿形像の大きく開けた口からは万緑の自然界のパワーを吐き出しているように見えた。

朝顔の蔓の奔放こそ親し

枇杷木 愛

朝顔のような蔓性の植物は茎がどんどん伸びて成長するので、体を支えるために何かに巻き付く必要がある。茎の先端はしなやかで、風などの物理的な力で揺れて、たまたま近くにある支柱などに先端が触れると、それが刺激となつて巻き付く。自由奔放な蔓こそいろいろな可能性を秘めていて私たちを楽しませてくれる。

正面に独立峰やとんぼ羽化

浜田はるみ

独立峰とは、並び連なっている山脈とは異なり、ただ一つ形成される山の事で、富士山の他に茨城県にある筑波山などがある。一つの山がでんと構えると、その山の存在意義が神々しくも感じる。そんな山に見守られながら、

とんぼの羽化という厳粛な命の営みが始まった。

合歓の花があんどあんと鉄工所

笠井 令子

合歓は淡紅の刷毛のような美しい花を咲かせる。夜になると葉を閉じて眠ったようになるので、この名がある。鉄工所の作業音は騒音には違いないのだが、合歓の花が咲く昼間に聞いていると、規則的な音の連続も、聞きようによっては耳障りではなくなった。「があんどあん」のオノマトペが面白い。

夏旺ん 不動明王背に炎

福田 肇

不動明王は険しい表情と、背後に燃え盛る炎が特徴的で、その火炎は迦楼羅炎の吐く炎そのものの姿で、不浄なものを焼き清める炎である。そんな不動明王が夏の暑さを守ってくれたのだろう。夏旺んはうんざりする暑さの時期をいうが、前向きに表現した季語である。

一人パオ出づれば銀漢音もなし

大多和明彦

作者はかつてモンゴルに旅をしたことがあるのだろう。パオは遊牧を営む人々が、その暮らしに合わせた組み立て式のテントの住居のことである。周辺に人工物の全くない、草原のど真ん中から見ると銀漢はさぞ見事なものだろう。

蛩袋の花の表をま一だ知らぬ

川崎登美子

蛩袋は子どもが袋のような形をした花のなかに蛩を入れて遊んだことからこの名がある。袋ばかりが目立っている部分の部分は俳句にも詠まれるが、花の表面部分のことはなかなか俳句の素材にも扱われない。注目した視点が面白い。



小坂 尚子

道 産 子

ものの芽や北方の地に根ざすもの
芽落葉松の列を正せか入植地
路の臺北の大地のほぐれゆく
遠嶺の風はこびたる花辛夷
耕せば地と響き合ふ鼓動かな
羊蹄と競ふがごとく鋤つかふ
道産子の蹄濡れをり春の土
離乳して見目麗しき仔馬かな
リラ咲いてここを故郷と決めにけり
透きとほる風の揺藍花ゑんじゆ

鈴蘭やそばだちやすき馬の耳
鬣に海霧のしたたる駿馬かな
泥流の地に馬鈴薯の花咲けり
花さびた馬の眼に風棲めり
この橋に兵士と軍馬晩夏光
馬柵より嘶き哀し秋北斗
火の山へ駆け上りゆく七竈
氷張る川鳴る音の静寂より
霏霏として方位決まらぬしまき雲
大寒の百年生くるポプラかな

沖作品



能村研三選

藤椅子の傾ぎ懐し古旅館

千葉

坂井 博

* 梯梧咲く守礼の門の朱を映し
十円玉子供の友でありし夏
万緑を吐き出してゐる阿形像
写経する墨の香清し風涼し

静岡

枇杷木 愛

* 逝く夏や川面錆色して匂ひ
夕陽重しと向日葵のぼんのくぼ
ニユース用語に不可解多し落し文
木馬道名残の杭や竹煮草
朝顔の蔓の奔放こそ親し
正面に独立峰やとんぼ羽化
青蛙ひと疑はぬ眼を持てり
移動図書館夏蝶止まる本を借り
奥へ奥へと不如帰ひとを呼ぶ
* まひまひのひらひら月へのほりをり

埼玉

浜田はるみ

* 逝く人に掛くる遺愛の夏衣
合歓の花があんどあんと鉄工所
紫蘇もみて色水遊び遠くせり
マタニティドレスにこぼれ百合花粉

山梨

笠井 令子

水しぶきあげ田植機の泥落とす
* 都路を祇園囃子のこんちきちん
七夕や滲む星たち六輔忌
夏旺ん不動明王背に炎
振花や球児右投げ左打ち
胡瓜にも小さき自衛の刺のあり
岩苔にせせらぎ白し山の寺
をみなごの挿頭にもがな花菖蒲
一遍忌浦に波音寄すばかり
一人パオ出づれば銀漢音もなし
轡締むモンゴルの川涼しきに

市川市

福田 肇

埼玉 大多和明彦